

「安楽死の望み」、生きたいという叫び 嘱託殺人、ALS患者は思う

会員記事

2020年7月26日 5時00分

シェア

ツイート

ブックマーク

スクラップ

メール

印刷

list

0



文字盤を使って会話をする増田英明さん＝2011年9月、京都市左京区

難病の筋萎縮性側索硬化症（ALS）の女性患者が薬物を投与されて殺害されたとされる事件は、同じ難病患者らに波紋を広げた。誰もが当たり前生きるために、社会はどうあるべきなのか。事件は重い問いを突きつけている。▼29面＝鎮静薬投与か

患者や家族でつくる「日本ALS協会」近畿ブロック会長の増田英明さん（76）＝京都市＝は、定年退職後の2004年ごろにALSを発症した。「孫の成長を見守ってほしい」という娘の言葉に勇気づけられ、人工呼吸器を装着した。現在は24時間、介護サービスを利用し、自宅で暮らす。朝日新聞が事件についての考えを尋ねたところ、メールで返答を寄せた。（佐藤美千代）



報道をみて驚いていると同時に、ついに起きてしまったか、という思いです。女性は、安楽死を望んでいると語っていたようです。

彼女がその意向を持ち、そのことについて強い希望をもって何度も語ったことは不思議ではありません。そしてまた、私たちALS患者は、生きたいと強く表明しなければ生きられません。

生きることが当たり前で、私たちは常に生と死の間におかれています。誤解して欲しくないのは、彼女の意思表示は、生きたいと思ったからこそのものであること、そして事実生きていたということです。安楽死という希望は彼女が作り出したものではなく、社会が作り出した差別の中で生み出された彼女の叫びなのだと思えます。

私はその女性とは面識はありませんが、彼女のように生きることに迷って、生きることをためらっている人はたくさんいます。ましてや、体が動かさずにコミュニケーションもままならない状態では、私たち患者自身も生きたいという意欲が持たずに尊厳死・安楽死に気持ちが傾いていくのは当然のことです。

社会は、ALSなど重度の障害者が生きることを簡単には認められません。そういう社会では、まさに今起きているように、彼女と他の患者の条件を比べて、同じ病や障害を持つもの同士を分断しようとしています。

きっと社会は、安楽死や尊厳死の法制化に向けて議論を再開するでしょう。そして、私はそれに反対することになります。こうやって同じALSなのに、さも私の存在や主張が彼女を否定するかのように受け取り、彼女と私をわけていきます。そうして、私や彼女、ALSの人が抱えている問題や苦悩を覆い隠していくのです。

私も彼女も同じです。ちゃんと私たちが直面している苦悩に、現実目に向けてください。彼女を死においやった医師を私は許せません。そしてその医師を擁護する医師や医療者、社会があるとすれば、その社会自体が否定されるべきです。

相模原（無差別殺傷）事件で経験したことが、優生思想が脈々と息づいています。

私たちが生きることや私たちが直面している問題や苦悩を尊厳死や安楽死という形で解決できないし、そうやって私たちの生を否定しないでほしいです。

いまこそ、「生きてほしい」「生きよう」と当たり前のことをあたり前に言い合える社会が必要です。（全文）

◇囑託殺人容疑で逮捕された医師2人について、京都府警は認否を明らかにしていない。

■病に抗い、自分の居場所確認したい

長崎県 大村市の平坂真さん（48）は、韓国の大学で教授を務めていた2017年、歩行に異常を感じ、翌年にALSと診断された。現在は車いすを使って生活している。

事件2カ月前の昨年9月、被害者の林優里さん（当時51）のものともみられるTwitterを読み、心配になって返信した。「自分の未来と重ねながらつぶやきを読んでいます」。すると、「人により随分進み方が違うので参考程度に」「なぜか他の患者さんには治る希望を持って欲しいと思う。勝手なものですね」と返事がきた。「（林さんの）死生観を自問していますが、自答は出来ません」と再び返した。

自身も闘病生活や日々の暮らしをブログにつづっている。医師2人が逮捕され、かつてTwitterでやりとりした人が被害者だと知った。自身のブログには「時間の経過と共に苦しみだけが増大していった。彼女はそんな人生に幕を引いた」と記した。平坂さんは「ALSは、進行と共に社会との物理的なつながりが狭まっていく病気」と考える。「それに抗（あらが）って、自分の居場所を確認したい。彼女がどうだったかは分かりませんが、少なくとも私はそういう目的で発信しています」（花房吾早子）